

キャラクター名
DX-28(ダックス)

プレイヤー名

シンドローム	ブラックドッグ	ワークス	UGNエージェントD	カヴァー	愛玩動物
	ブラックドッグ				
オプション		年齢		性別	
覚醒	死	衝動	恐怖	初期侵食率	38 %
出自	犯罪者の子	経験	実験体	邂逅	主人

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	75
肉体	4	0	0			4	行動値	6
感覚	2	0	0			2	(非装備時)	6
精神	2	0	0			2	戦闘移動	11
社会	0	1	0			1	全力移動	22

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			RC	1		交渉	1	
回避			知覚	1		意志			調達	1	
運転:			芸術:			知識:			情報: UGN	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
超電磁荷電光熱刃	白兵	4r+1	2	9+?		フルオートアタックでの装備時、この装備による効果に対してガードが行われた場合、効果が半減してダメージを減らす。
超電磁荷電粒子砲	射撃	2r	2	8+?		リニアガン/フルオートアタックでの装備時、この装備による効果に対してガードが行われた場合、効果が半減してダメージを減らす。
超電磁荷電光熱刃 -Over Load-	白兵	4r+1	2	9+?		<復讐者>雷鳴*2
超電磁荷電粒子砲 -Over Load-	射撃	2r	2	8+?		<復讐者>雷鳴*2

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タリ	消費
両親	P 懐旧	N 敵愾心		
テレーズブルム	P 尽力	N 恐怖		
黒のイゴール	P 憧憬	N 憐憫		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 4 残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果:	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果:	コスト分のHPで復活							
ハードワイヤード	5		常時		自身	自動		
効果:	ブラックドッグ専用アイテムをLv個、常備化							
ペインエディター	5		常時		自身	自動		
効果:	最大HPを+[Lv*5]する。							
CR:ブラックドッグ	2		メジャー			自動		
効果:								
雷鳴の申し子	3	5	メジャー			対決	ピュア	
効果:	このエフェクトを組み合わせた攻撃に+[最大HP-現在HP]する。プロセス終了時にHPは0になる。Lv回使用可能。							
マグネットフォース	1	2		至近	自身	自動		
効果:	対象にカバーリングを行う。これは行動に含まれない。							
電子使い	★							
効果:	CD,DVD,BD,HDなどの電子媒体の読み込み、書き込みができる。							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

「幸せな家族、大切な友人、掛替えのない恋人。その全てが、彼方へと消えていく。いや、本当に消えていくのは……」

初めて目を覚ましたのは薄暗い研究室のような場所だった。目の前には肩にフクロウを乗せた少女が立っており、少女はほんの少し安堵の表情を浮かべたかと思うと、直ぐに真面目な顔に戻した。

「どうかしら、『DX-28』。動作は良好？」

そこで漸く彼は気づく。己が身体が人ならざるものとなっていることに。小さな手、小さな足で4足で立つこの生き物は…犬。それも、余すところなく全身がマシン化していた。よく見ると周りには研究員風の人間がなにやら機械を操作している。

「驚くのも無理はないわ。貴方、無傷だったのは脳だけだったんだから」

少女曰く、DX-28と呼ばれた彼は、ある事件に巻き込まれて全身を損傷する大重体だった。医師団が首を横に振っていたところ、少女が身柄を引き取り、脳を電磁パルスに繋いで全身を機械化させ、命を永らえさせたと言うのだ。

「動物のオーヴァードは例があるけれど、フルオートアニマルオーヴァードだなんて…初めてだわ」

DX-28には少女がなにを言っているかさっぱり分からなかった。しかし、脳は無傷だったとはいえ、実験以前の記憶が一切ない彼にとって恩人であるこの少女のみが頼るあてなのは間違いがなかった。

「…ええ、言われなくても貴方にはしっかりと働いてもらうつもりよ。私の名前はテレーズブルム。よろしくね、『ダックス』」